

北海道大学アイヌ・先住民族研究センター  
シシリムカ・サテライト 2008 年度第 1 回講座（札幌会場） 講演録  
「マンローと鳥居 ー同時代を生きた二人の事績、その活用」

日 時： 2008 年 6 月 15 日（日）

場 所： 北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W202 号室

主 催： 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

演 題： マンローの考古学研究 ～横浜時代を中心に～

講 師： 慶應義塾大学准教授 岡本孝之氏

資 料： プログラム、講師プロフィール

マンローの横浜時代 ～二風谷定住以前の足跡～

マンローの考古学研究 ～横浜時代を中心に～

内 容

はじめに

ただ今ご紹介いただきました横浜から来た岡本孝之です。どうぞよろしくお願いたします。北海道でお話する機会を持たれたことを大変うれしく思います。

天羽さんと私は二人とも慶応大学の出身ですが、私は5年下です。高校生のときから天羽さんを知っていましたが、一緒にできることをうれしく思います。天羽さんは幸せな大学時代を過ごしたと思うのですが、私の時代は激しい時代でした。二人の共通の考古学の先生として江坂輝彌先生がおります。私は江坂先生に青森の下北などに何回も調査に連れていかれました。九州にも調査に行ったことがありますし、天羽さんとは四国の上黒岩岩陰遺跡という縄文時代草創期の遺跡の調査を一緒にしたことがあります。日本列島全体を考える江坂先生の学風というか、調査・研究の成果だったのかも知れませんが、そういう見方を育んできました。その当時のことから、アイヌについても、結城庄司や新谷 行の本を読んだりしていました。日本列島をトータルに考えることを大学院修士課程のころに整理したことがあります。さきほど紹介していただいた『考古学ジャーナル』の「東日本先史時代末期の評価」です。

少し紹介させてもらいます。日本列島を簡単に書きます。弥生時代の前期の段階では、伊勢湾と北陸の西側に境があつて縄文文化と弥生文化の境界となります。北海道を含む東日本は縄文文化の世界が広がっていました。中期・後期の段階になると、北海道と東北を分ける津軽海峡ところまで弥生文化が広がるというのが一般的な説明となっています。しかし、弥生時代の中期の後半から後期にかけての段階では、南関東から新潟を結ぶラインまでの西側が本当の弥生文化で、東側はまだ縄文文化であると私は考えています。弥生時代の後期から古墳時代になるときに弥生文化は古墳文化となって宮城県あたりまで入って来ます。古墳時代の後に東北の蝦夷エミシの問題が出てきて坂上田村麿が登場します。中世の蝦夷エゾを経て、江戸時代には北海道南部の松前が日本人によって占拠され、昨日銅像を見てきましたが、シャクシャインの乱などが起きます。明治維新になって北海道が日本政府によって支配されて今日にいたるという認識をもちます。このような歴史、時代や地域を移してさまざまな軋轢がおこり、それを乗り越えてきたのが日本人の歴史であると考えています。

日本の歴史を見ますと、縄文時代があり、弥生時代が続きます。ここに大きな文化的ギャップがあります。中国、朝鮮から新しい文化が伝わり、縄文から弥生に変化するところが、先史、あるいは原始の社会から、弥生という古代の社会の始まりになります。弥生化、古代化の画期として評価します。古代の社会が完成するのが、奈良平安時代の律令の社会です。具体的には、本州の方では古代寺院の成立や役所関係の遺跡として発見されます。古代の始まりと古代社会の完成に関心がある私は、10年ほど前から神奈川県内の古代寺院の調査に携わってきました。

この古代の社会が完成して、中世・近世と引き継がれていきますが、つい最近150年前になって、ここで古代の世界がひっくり返って今の近代の社会ができあがります。私もそれを調べてみたいと思い、近代遺跡の調査にも関わるようになってきました。神奈川県には米軍の横須賀基地があり、東日本では一番古い建物が残っていました。建物としては残せないのが、移築しようと米軍と横須賀市教育委員会とのやり取りがあり、移築のための調査を手伝いました。

原始から古代に変わる。古代から近代に変わる。その二つのところを考古学で比較したら面白いのではないかと今考えていますが、近代を勉強するには、私は考古学ですので、考古学史を勉強しなければならないという思いがあります。これは縄文時代の貝塚の調査をして、古く発見された貝塚の所在地が分からないということを経験してきました。位置の不明な貝塚が多いことを、「神奈川の貝塚に学ぶ会」の仲間と分布調査を繰り返してきて、研究史の知らなさに驚いているところです。

横浜にいてマンローをあまりにも知らない思いもあって、私は一度調べたいと考えていました。マンローの仕事の自分なりに確認しようと勉強したのが2003年で、2004年5月に『神奈川考古』という研究誌に発表しましたら、10月に北海道の出村文理さんから手紙をいただきました。マンローは1905年に三ツ沢貝塚を発掘します。その100周年記念に、横浜市の博物館で計画は持っていましたが実現できませんでした。埋蔵文化財センターでは、毎年横浜市内で普及のための展示会を開いていますので、その年はもう少し大規模にしようと埋蔵文化財センターにいた坂本彰さんが展示会とともに講演会を企画しました。そこで出村さんから国立歴史民俗博物館でマンローの撮影した映画を研究している内田順子さんを紹介されました。その翌年に北海道からマンローの遺跡（病院跡や三ツ沢貝塚など）を訪ねたいと、平取町の吉原さんはじめ10名近くの方が横浜に来られ、私も案内を手伝いました。そして今日に結びついてきたわけです。私の考古学の一つであるマンローのお話ができることをうれしく思います。

## マンローの考古学調査

マンローのイギリス時代やインド時代については、私にはわからないところです。横浜に来て何時から日本の考古学について勉強を始めたのか、本人は1895年くらいから勉強を開始したと述べています。1904年に東京大学医学部の先生だったベルツと一緒に横浜の競馬場付近貝塚を発掘しています。その競馬場付近貝塚もよくわからないところでした。資料の3枚目の右側は、2006年に横浜市での講演会のときに作ったもので、1906年ごろの地図にマンローの関係したところを印したものです。根岸湾に面した6番の黒丸が、根岸競馬場付近貝塚として推定されていた位置です。横浜市や神奈川県の遺跡地図にある位置で、ここに行っても貝塚はわかりませんでした。白丸で示したところに貝塚がありました。「神奈川の貝塚に学ぶ会」で調べ上げたものです。今、米

軍の本牧の住宅地として接収されているところはフェンスで囲まれています。フェンスは台地の上の縁にあって、その外側の斜面が空地として残されています。そこを周辺住民がかってに耕作地として利用しています。土壌の移動などがあって、時々貝が顔を出します。貝があることは、かなり前から分かっていたのですが、古い貝塚ではなくて新しいのではという評価がありました。それで躊躇していたのですが、最近になってまた貝が顔を出したので、みんなで見に行つて調べたところ、古い貝塚でいいのではないかと認識を改めています。この地点の貝塚は、昭和の初めに横浜考古学研究会が調査をし、横浜の考古学研究史としては欠かすことができない遺跡でもあったのです。それがようやく再確認できたのです。すぐそばに今は使われていない大きな競馬場があり、その西方に位置します。

未確認ですが、その2年くらい前にさかのぼる調査が浮上しています。チェンバレン（東京大学のお雇いの国語学・言語学の先生）が、横浜の鶴見で大規模な発掘をしていることを、江見水蔭（忠功）という小説家が書き残しています。太古遺跡研究会という民間の研究組織を作り、仲間に、高島多米治という歯医者先生の先生もいました。坪井正五郎、八木柴三郎も参加しています。江見水蔭は、『地中の秘密』や『地底探検』など調査の実録ものを刊行して子供たちの考古熱を盛り上げます。『三千年前』は小説で、これを読みますと、関東の縄文人に対して西の方から弥生人が攻めてくるというイメージの小説です。私と重なるところもあります。その江見の本の中に、チェンバレンが鶴見で発掘したという記述があります。発掘は江見の文章から1902年頃ではないかと推定できます。それならばマンローが、その発掘に参加した可能性はないだろうか、チェンバレンの発掘の記録も他から見つかるかどうかを今調査中です。

マンローとチェンバレンの関係の最古のものは、愛知教育大学におられた荒川邦彦先生が指摘された1900年に箱根富士屋ホテルと一緒に居たことです。2ページ目の左側の年表に記していますが、右側は、富士屋ホテルのレジスターブックのコピーです。下段に、Dr. マンローとあります。出身はスコットランド、住所は横浜とあります。日付は上の欄に、1900年9月1日とあって同じ日になります。これがマンローの横浜時代のもっとも古い筆跡です。この年にチェンバレンとマンローと一緒にいて知り合いであるならば、1902年の鶴見での発掘参加の可能性はかなりあると思います。

その後、三ツ沢貝塚を日本で最初の大規模な調査として1905年の秋から1906年の春ごろまで、7ヶ月調査をしました。資料の3ページの右側の地図の1番が三ツ沢貝塚で、その三ツ沢貝塚を発掘したときは、②の高島山30番に、住所を持っています。三ツ沢貝塚の長期の発掘に対応して新しい家を構えたのだらうと思います。1kmくらい離れたところでは。

三ツ沢貝塚の後に川崎市南加瀬貝塚を2日間、調査をします。縄文土器と弥生土器に年代的な差があることを初めて確認できた発掘調査でした。三ツ沢貝塚の調査でも縄文土器に年代差があることを初めて確認しています。そのころの鳥居龍蔵は、縄文土器を厚手式、薄手式などに分けて集団差と考えていました。年代の違いではなくて、住んでいるところの地域の差、山の部族、海の部族、そういう捉え方で考えていました。弥生土器も同じ考え方で、固有の日本人の文化として認識されていますが、南加瀬貝塚と三ツ沢貝塚では、それぞれに年代的な差があることを初めて捉えています。

調査のもう一つに軽井沢遺跡の調査がありました。この軽井沢をマンローの伝記を書いた桑原

千代子さんは、長野県の軽井沢にすぐ結びつけてしまいましたが、横浜にも軽井沢があります。3ページの右側の地図の9番が、軽井沢遺跡の位置で貝塚も発見されています。

三ッ沢貝塚以前の調査として、箱根で旧石器の調査をしています。旧石器そのものが見つかったとは本人も認めていませんが、早川や酒匂川の流域で1905年の初夏と盛夏に2度行っています。そのときの富士屋ホテルのレジスターブックを探してみましたが、そこにはマンローの名前は出てきませんでした。マンローは箱根には1907年にも1910年にも行っています。資料の5枚目の左側に写真を並べていますが、真ん中と右下に、マンローとチェンバレンが二人写っている写真があります。これらが1907年の撮影であることは間違ありません。この中にチェンバレンとチェンバレンの弟子の杉浦藤四郎が写っていますので、藤四郎の関係で1907年に絞れる写真です。これがマンローの最も古い写真です。早川や、酒匂川の調査の場所が少しでもわかればと思っています。宮ノ下の富士屋ホテルからは、早川はすぐのところですし、酒匂川の流域はその当時箱根に宿泊した外国人たちは、箱根の外輪山を越えて直接行き来していた場所ですので、マンローも宮ノ下のホテルに泊まって調査をしていたのではないかと思います。

1914年の鹿児島での調査は、3番目の奥さんと結婚したとき新婚旅行も兼ねて出かけています。ベルツと一緒に鹿児島での調査を計画していますが、ベルツの帰国で実現できなかったものを実行したものです。帰国していたベルツは1908年3月に大正天皇（このときは皇太子）の病状を見てくれという伊藤博文の要請で再び日本にきます。その時一緒に夜行列車に乗って関西旅行をします。関西旅行といっても京都の博物館に一緒に行ったことがベルツの日記に出てくるだけで、ベルツは広島別の患者を見に行きます。帰りはまた一緒に夜行列車で東京に戻りますが、その間1週間くらいマンローは、奈良県の古墳調査をしています。それが資料の5枚目の右側のページの左上にある石舞台古墳の写真です。この石舞台の調査をベルツはしていませんので、マンローが撮った写真を譲り受けて載せた写真だと思われます。真ん中でひざを曲げているのがマンローで、立っている人ははっきりしないのですが、もしかしたら横浜商業学校の先生であった水上久太郎であると思われます。水上は、小樽の忍路遺跡の調査にも参加した人物です。

長野県では避暑地軽井沢での調査がいつ始まったかが一つのポイントです。1905年のことはほかの記述が出てきませんので、先ほども言いましたように横浜の軽井沢だろうと私や横浜市坂本さんは考えています。桑原千代子さんは、1915年に諏訪湖の曾根遺跡に関心を持っていたと指摘しています。寺ノ浦遺跡を訪れたマンローの写真が『長野県史』に載っています。地元の人と調査をしている写真があり、柳沢平助の留書帳にサインが残されています。1930年のことです。宮平遺跡の立派な耳飾りをほしがったという話、八幡一郎の発掘した茂沢遺跡を馬に乗って見学に来たことなどが知られています。

北海道の調査は1898年に最初の旅行をしたと、出村さんや、桑原さんの本に出てきますが、これが私にはよくわからないところですが、マンローとチェンバレンとの関係がわかってきましたので、再検討してみたいと思います。チェンバレンは帝国大学の先生になった1886年に蝦夷の文献を調査し、こちらに来てバachelorのもとに一ヶ月程泊まって、アイヌの調査やアイヌ語の研究をしています。その研究成果はまだ直接的関係がなくても横浜で出版された「日本アジア協会」の研究報告を見れば勉強できただろうと思いますし、それをみて知り合いとなっていたかもしれません。

ベルツとの関係も 1904 年の発掘だけではなかったことがわかりました。マンローの医師としての経歴は、横浜一般病院 30 年間院長として勤めていたという説は、まったくの思い込みというか裏づけがなかったことが分かってきました。一昨年の講演会の直前になって、横浜市都市発展記念館の青木裕介さんと横浜開港資料館の伊藤泉美さんが、横浜のジャパン・ディレクター（商人録）を調べて、住所が複雑に変わっていることがわかりました。医院を開いていた場所もゼネラルホスピタルではなく、まだ独身のときは自分の住まいで開業していました。ベルツの関係でも、ゼネラルホスピタルにマンローが勤めていたとき（最初の奥さんと一緒になったときです）、ゼネラルホスピタルの顧問医をベルツがしていました。それだけでなく、マンローはその後にメイプルズ・ホテルをつくったようです。これはすぐにセント・ジョセフ・カレッジに変わってしまいましたが、6 ページの左側の下にある写真がメイプルズ・ホテルの全景ではないかと、横浜開港資料館におられた堀勇良さんが、もう 10 年以上前に指摘していました。4 ページ目の左側の図に「H」と示したところが、マンローが勤めていたゼネラルホスピタルの位置です。その右側にセント・ジョセフ・インタースクールがありますが、これらの場所が山手 82 番、85 番の位置です。全景を見ると 3 階建ての立派な建物です。有名な建築家コンドルの設計です。3 階建ての建物の裏側がゼネラルホスピタルの位置になります。そして右側の建物にマンローは住んでいたと推定されています。メイプルズ・ホテルというのは、病院（サナトリウム）とホテルを兼ねた施設でした。これをベルツとマンローが顧問として運営していたのです。この病院は 1 年と少しで閉鎖され、セント・ジョセフ・カレッジというナショナルスクールに変わってしまいます。マンローは病院を経営しようとしたが、うまくいかなかった。失敗してしまったことが、最初のドイツ人の夫人との結婚生活が続かなかった理由の一つではないかと勝手な憶測ですが推測します。マンローは奥さんの方にいろいろな事情があったと、桑原さんは書いていますが、離婚の理由として病院経営の失敗があったと思います。

1906、1907 年の忍路遺跡調査の年代はいま議論されているところです。1907 年に平取に来たのは、マンローが書いていることなので確かだと思います。その後、東釧路の調査、白老の調査が続きます。マンローの考古学的な調査は、横浜、箱根、鹿児島、長野、北海道と日本全国に及びます。青森にもいっていることが佐藤 薮の資料をみていること、青森関係の資料が東京国立博物館の寄贈資料に入っていることから知られます。

マンローの三ツ沢貝塚で採集した環状石斧を、私は調べたことがあります。マンローの資料が、東京国立博物館の所蔵リストにあり、実際に見て図を取りました。私もマンローの調査の学恩を受けています。

## マンローの先生と友人

マンローがイギリスでどんな勉強をしたのか、教えを受けた研究者について、今わかっているのは、イギリス人の考古学者セイスと、アーバクロンビーです。1908 年にマンローがドクターの称号を得るために一時帰国したとき、鼎談したことが浜田耕作の著作にみられます。

日本にきてからはベルツやチェンバレンの教えを受けていますが、バチェラーとの関係がどこまで遡るかということは、私にはまだわからないところです。1898 年に北海道旅行でバチェラーの案内を得たことについて、もう少し確実なことを知りたいと思っています。

東大の医学部の解剖の先生だった小金井良精は、ベルツの弟子でもあったのです。三ツ沢貝塚で見つけた人骨を一緒に研究しようと、マンローは小金井良精に持ちかけて承諾の返事をもらいます。一緒に論文というのは残されていませんが、石器時代人アイヌ説に二人とも組んでいます。ただ小金井良精は、伝記などをみますと北海道にきてアイヌの人骨を得るため怪しい発掘をしています。そこが問題ですが、仲が良くて、亡くなるまで友情は続いたと、小金井良精の孫の星新一（SF作家）が、おじいさんの伝記の中でまとめています。坪井正五郎は、東京大学の最初の人類学の先生でしたが、日本の考古学を最初に築いたモース（大森貝塚を発掘）とはあまり関係ないという発言を多くしています。しかし、100年も経って見れば、モースの成果を受けて、坪井らのグループがあったと見ることができます。

マンローは1908年に『Prehistoric Japan』を出しますが、そこには東京大学の資料が写真として随分入っています。大野延太郎、八木柴三郎の名があります。鳥居龍蔵は『Prehistoric Japan』の頃は、蒙古の調査にほとんど毎年出かけていますので、マンローの仕事が一番集中していた1908年の頃には接点がすくなかったと思います。高橋健自は、東京国立博物館の考古学の研究者で、今の日本考古学会に繋がる考古学会を取り仕切っていた方です。和田千吉も同じ職場で、国立博物館の資料もたくさん使っていました。浜田耕作は京都大学で最初に考古学の講座を開いた人です。坪井正五郎のコロポッコル説に対していろいろな批判をしてアイヌ説の仲間に入りますが、縄文土器とアイヌ文様が類似しているということを、若い高校生のときに発表しています。マンローも同じことをしています。面識はどこまで遡れるかわかりませんが、マンローが1908年にスコットランドに持ち込んだ資料を最初に見た日本人の一人になります。高島多米治は、民間の収集家でした。高島の資料は、のちに滋賀県の方に移りますが、1922年に東京の生保会社で開いた展覧会に、大勢の研究者たちが集まります。それに参加した國學院大學の大場磐雄の日記の中にマンローの名前が出てきます。

これらの研究者とは別に、「横浜古泉会」という古銭収集の会の仲間でもありました。村松久太郎は、ベルツと競馬場付近貝塚を発掘したときの人ですが、この人も骨董商で、マンローの1904年の最初の著作である『Coins of Japan』の中に写真があります。5枚目の左側下の写真です。お寺の坊さんのような格好をしています。村松は『Coins of Japan』の作成を手伝い、マンローを考古学会に紹介した人として知られています。「横浜古泉会」では古い段階と新しい段階とがあります。村松は古い段階の時の中心メンバーの一人です。新しい段階の中心メンバーである藤田巳之助は、桑原さんの伝記にも出てきますが、マンローが鹿児島に旅行したときに一緒に連れて行かれて助手的な事をする、北海道にも一緒に来て写真を撮り、病院ではレントゲンの撮影をしたといいます。「横浜古泉会」では、毎月各自持ち寄って集会や展示会を開き、その会報にマンローのものも出てきます。その会員に怪しい人がいます。ラムスデンというオランダ人ですが、キューバ総領事という肩書きで現れた人です。インターネットで調べるとニセ金を作っていた人と指摘されていました。ラムスデンは考古学会にも入っていたので、マンローとも面識はあったはずですが。

先ほど言いました水上久太郎をもう少し追いかけてみたいと思います。マンローが八木柴三郎の本を翻訳させようとしたことが、清野謙次が述べています。水野君という慶応出身者に翻訳させようとしたとあり、水野君はもしかしたら水上久太郎かなと思います。資料の5枚目の右側に年譜

と写真を示しました。写真の前から2列目の左から5人目の人が水上久太郎で、その隣に美沢 進校長が写っています。水上久太郎は、忍路の調査では、横浜商業学校校長という肩書きで紹介されていますが、実は校長ではありませんでした。マンローも横浜の病院長と紹介されていますが、それはゼネラルホスピタルの院長ではなく、横浜の病院の経営者として理解すべきであろうと思います。マンローは病院を経営していましたので、横浜の病院長であることは間違いのないことです。それが30年経営していたとするこれまでの理解が間違いでした。本人は20年近くと言っており、実際に病院を経営していた経歴を見ると20年くらいですので、本人は正しく言っていたのです。

これから鳥居龍蔵らとの接点をもう少し調べてみると、また新しい情報が出てくるのではないかと思います。他の人物との交流関係を調べることによってマンローの人物像やその時代の歴史がわかってくるとと思います。

### マンローの先駆性

マンローの考古学の先駆性を最後のまとめとしてお話します。7カ月の調査というのが画期的でした。その後の長い調査は、東京大学が宮内庁の支援を得て5カ月、千葉県姥山貝塚という縄文時代の集落でたくさんの住居跡を発掘していますが、それは1926年のことです。

最初のトレンチ調査を行っています。トレンチとは軍隊の塹壕という言葉です。溝状に掘る調査はマンローが最初にしたことです。このマンローの調査を見た江見水蔭は、奇怪な発掘だと思っています。マンローの調査は、楊枝のようなものでもっと丁寧に掘れ掘れといわれて閉口したと発掘に参加した人が書き残しています。丁寧に発掘をした最初でもありました。住居跡、炉の跡などの遺構を最初に掘った人物としても知られています。そして人骨群の発掘も最初でした。その人骨群は単なる人骨群ではなくて、一軒の住居跡に埋葬されたものでしたので、縄文時代の家族を知る手がかりの最初の資料の一つとなりました。

マンローの発掘は、ただ上から掘りすすめるのではなくて、一枚一枚層を捲くように掘る。そして縄文土器と弥生土器の年代が違うことを最初に確認しています。神奈川県平塚市万田貝塚で、大正時代の1924年に八幡一郎、中谷治宇二郎などの発掘で縄文土器の年代差を層的に最初に確認したといわれていますが、それよりも15年以上前にマンローは確認していたのです。

旧石器時代の存在は、イギリスで勉強していたので当然だったのでしょうが、当時の日本人は視野に入っていませんでした。そのところを主張して、自分でも手に入れようと調査をしたことは画期的でした。

弥生土器の評価も、南加瀬貝塚の調査で最初の年代的な指摘をしました。マンローは「中間土器」という名前を付けましたので、これを「なかまの土器」と、まわりから揶揄されたといえます。ところが八木柴三郎も中間土器という言葉を使い、八木柴三郎が日本語で書いていたこともあり、よく取り上げられますが、マンローは1906年の発掘した直後に、「日本アジア協会」の機関誌に発表しています。マンローと八木柴三郎は同時に別々の発表をしたのでした。

『Prehistoric Japan』は、解説書としては写真をたくさん用いて資料を提示したということでも最初の画期的な本でした。英語で書かれて日本向けではなく、読み込まれなかったことが残念なことでした。マンローの仕事やその考え方には、多くの最初の見方がありました。今日的にも

再検討していかなければいけないと思います。

私としては、縄文から弥生に変わったときから現在までにつながる一つの軌轍の歴史があり、日本列島の西から東、南から北へ拡大してきたという考え方を持っていますので、北海道についても勉強したいと思っています。マンローの足跡をさらに調べたいと思いますし、北海道大学のラファエル・アバさんの研究にも期待しているところです。少し長くなりましたが、私の報告を終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。